グラブルオルガ

ADS_

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ていうか、何でチョコの人が６人もいるの」
「は？」
「どうか、私のために争わないでいただきたい！」
「どうして空は蒼いのか…」
「あまりにイレギュラーが過ぎる」
「手当てしましょうか？」
「オオオオオオ！」
「ムンムン！」

「「「「会えて嬉しいよ、鉄華団の諸君」」」」
「勘弁してくれよ…」

目　次

#1 ―――――――――― 1
フェイトエピソード　光をもたらす者 14

＃1

　ここは”閉ざされた島”ザンクティンゼル。雲海に覆われた世界のはずれに浮かぶ小さな島である。そんな島でただひとつの集落・キハイゼル村の片隅に、ふたりの少年の姿があった。

「待ってるよ、グラン」

「ごめん、もう少しかかる…っていうか、ミカヅキはそんな軽装でいいの？　オルガもスーツのまま先に行っちゃうし」

「別に、普通でしょ」

　青いパーカーの上から今まさに軽鎧を装備しようとしている茶髪の少年グランは、先ほど我慢できずに走って訓練場に向かってしまった特徴的な前髪の青年・オルガのことを心配していた。と、言うのもグランの訓練場は金露樹林という森の奥地にある。幼いころから森に親しんできたザンクティンゼルの住人でなければたちまち迷子になってしまうだろう。そしてオルガとミカヅキこと三日月・オーガスはそうではなかった。

　オルガと三日月はこの島の出身ではない。…正確に言えばこの「空の世界」の生まれでもない。彼らの出自については割愛するが、ふたりで倒れていたところを村人たちに

発見され、以来グランの自宅に居候しているのだ。世話になっている村のため、とオルガと三日月はすすんで力仕事を請け負い、一定の信頼を得ている。特に三日月はグランの訓練相手になり武器の扱いを教えあったり、島民から農学を学んだりと充実した生活を送っていた。

「今ごろ迷ってるんじゃないかなあ…」

「だと思う。ねえグラン、おれを連れてってよ。オルガのとこまで」

もちろん！　と立ち上がるグラン。使い古した片手剣を腰に挿し、いざ出発というところで三日月があさっての方向を見上げているのが目に入った。

「何あれ」

「えっ――」

グランが視線を動かすより早く、上空で派手な爆発音が響く。遅れて彼が見たものは黒煙をあげる巨大な鉄の塊だった。

「おぉーい！　グラーン！　ミカヅキぃー！」

「あ、ビィ。オルガ見つかった？」

「すまねえ、途中で見失っ――てオイ！　それどころじゃねえだろ!?　あのデケェ戦艦が見えねえのかよぉ！」

爆発を聞きつけたのか、羽を生やした小動物がグランと三日月に向かって呼びかけな

がらすっ飛んできた。が、三日月の外れた問いかけにすぐさま怒鳴りつける。名前はビィといい、”ドラゴン”と自称している。グランが生まれたときからの付き合いで、彼の相棒だ。

三日月とビィが漫才を繰り広げる中、戦艦から目を話さなかったグランは”それ”を見逃さなかった。

「！　今、空で何か光った…」

「火がついた部品かぁ…!?」

「――オルガ…？」

もしビィの考えが正しければ、森が火事に見舞われるおそれがある。何より、三日月のつぶやきがグランとビィの焦りを駆り立てた。

「オルガが森に……！　僕が確かめに行く！ミカヅキは村に残ってみんなに避難を呼びかけて！」

「分かった。本当はおれがそっちに行ければよかったんだけど、森のことはまだよく分からないから、そっちは任せていい？オルガが呼んでくれればおれも行くから」

「うん…？　うん！　任された！」

◇

にわかに騒がしくなり始めたキハイゼルと対照的に、金露樹林は静けさを保ってい

た。その最奥、小さな祠の前で、鉄華団団長オルガ・イツカは目を覚ました。自動復活した。
「ぐ…！　ハッ！　おお、グラン…」
「おお、じゃないよオルガ！　大丈夫なの!?」
「俺は、鉄華団団長…！　オルガ・イツカだぞ…！　こんくれぇなんてこたぁねぇ！」
　言いながら立ち上がるオルガだが、ふらついて今にも倒れこんでしまいそうである。やはり落下物で頭を打っているのでは？　グランは心配になった。落ちてきたものが近くにあるはずだと考え、あたりを見渡した彼は、村で見たものと同じ光を見つけた。
　それは白いワンピースを身に付けた少女だった。気絶して倒れており、青い長髪が地面に広がっている。グランが見た光は胸に光る宝石から発せられたものだった。
「女の子だ…！　きみ、しっかりして！」
「お、おい！　大丈夫かぁ!?」
「こんくれぇなんてこたぁねぇ！」
　寝ぼけたままのオルガをひとまずおいて置いて、ふたりは駆け寄り、グランが軽く肩をゆする。すると少女はすぐに目覚めたが、驚いて身を引いてしまった。これはいけない、とグランは警戒を解くために手を引っ込めた。
「怪我とか、ない？　大丈夫？」
「気を失ってたみたいだけどよう」

「は、はい…。　ちょっと頭が重い感じもしますけれど…大丈夫です！」
　少女は素直に会話を交わしてくれた。ほっとしたグランはまず自己紹介から始めることにした。
「僕はグラン！　こっちはドラゴンのビィ！」
「俺は、鉄華団団長…！　オルガ・イツカだぞ…！」
「グランさんとオルガさんと…そ、空飛ぶトカゲさん？」
「んなっ!?　オイラはトカゲじゃねえ！」
「はわわ！　ごめんなさい！」
　呼び捨てでいいよ、とグランははにかんだ。見れば、未だにふらふらしているがオルガもグランたちのそばまで来て、少女と顔合わせをしている。
　少女はルリアと名乗った。話を聞くに追われる身で、カタリナという人物と行動を共にしていたらしいが、どうやらはぐれてしまったらしい。
「カタリナは、綺麗で、強くて、私のそばにいてくれる…！」
「正直ピンと来ませんね…」
「コラッ！」
　思ったことをそのまま正直に口に出してしまうオルガを咎めたビィが頭をはたく。そしてそれはオルガにとっては致命傷であった。オルガは短くうめき声をもらして、斃

れた。
「俺は止まんねぇからよ…お前らが止まんねぇ限り、その先に俺はいるぞ！　――だからよ…〟止まるんじゃねぇぞ〟…！」
「うん、分かった。そのカタリナさんを探そう！　オルガの言うとおり、止まっている時間が惜しいや。ひとまず村で情報収集を…」
「いたぞぉーっ！」
鋭い声がグランの言葉をさえぎる。見ればいかつい鎧に身を包んだ二つの影。オルガは怪訝な顔をするが、グランはその姿に覚えがあった。
「何なんだよこいつぁ？」
「エルステ帝国…！」
エルステ帝国。武力でもってここ一帯の空域、「ファータ・グランデ空域」の支配をもくろむ軍事国家である。
「そこの者たち動くな！武器を捨てて両手を上げろ！」
「命が惜しいなら、おとなしくその少女を引き渡すことだ」
〟命が惜しければ〟と帝国兵は威嚇するが、グランとオルガは引かない。グランは抜剣し、オルガはハンドガンを取り出して片膝をつき、射撃の構えをとった。
「いやだ。信用できないね！」

「あぁ、筋が通らねぇ。そうだろ、ビィ」
「だな！」
　思わぬ抵抗の意思を見せられた帝国兵は業を煮やしてそれぞれ剣とクロスボウを構え直し、手近にいたグランに狙いを定めた。
「ガキどもが…！　後悔するなよ!!」
「…ッ！」
　グランは帝国兵の剣を正面から受け止め、何度かの衝突の後、状況は膠着する。そこでグランは競り合う帝国兵の横合いからもうひとりが自分の頭を狙っていることに気が付いた。グランの頬を冷や汗が伝う。果たして放たれた矢は――オルガの背中に吸い込まれていった。
「〝団員を守んのは俺の仕事だ〟…！　うう〟っ！」
「馬鹿な!?　確かに狙ったはずだ！」
「俺は止まんねぇからよ…お前らが止まんねぇ限り、その先に俺はいるぞ！　――だからよ…〟止まるんじゃねぇぞ〟…！　今だ、やっちまえ！　グラァン！」
　自動復活したオルガに活を入れられたグランは相手の剣を弾き上げ、がら空きになった胴を一閃した。続いて、矢を放ったことで隙を晒したもう一人と距離を詰め、頭部へのラッシュで昏倒させ、戦闘は終了した。

◇

ルリアは被弾してまたもふらつくオルガに駆け寄り、覚えたての治癒魔法をかけようとするが、オルガはこの場を離れることが先決とばかりに歩き始めた。
「はわわ…！　オルガさん、大丈夫ですか!?」
「こんくれぇなんてこたぁねぇ！」
「で、でも！」
「いいから行くぞ！　…皆が、待ってんだ…」
「！　そうだ、村の皆が危ない！　ルリア、ビィ、オルガの言うとおりここは村に戻ってこのことを知らせよう。ミカヅキとも合流しないとね」
その時、がちゃり、と金属の鳴る音がした。森の中でそんな音が聞こえる原因は分かりきっている。グランはルリアを守るように前に出るが、体を起こした帝国兵の銃口はグランたちでなく、真上を狙っていた。もうじきここに援軍がやってくることを察知し、グランは迷わずパーティに撤退の指示を出した。もちろん目の前の帝国兵の意識を刈り取ることも忘れない。また、撃たれるのではと構えていたオルガは露骨に安堵していた。自動復活持ちとはいえ、痛いものは痛いのである。
「信号弾か！　皆、ここは一旦退こう！」
「なんだよ…！」

グランたちが動き出そうとすると、近くの茂みが音を立てて揺れた。
現れたのは女性兵士であった。兜は装備しておらず、茶色の長髪が揺れている。一行は警戒するが、それもすぐにルリアの声によって解かれることになった。
「カタリナ…！」
「ルリア！　無事かッ!?　とにかくここを離れよう。君達もだ！」
「分かってるよんなこたぁ！」
今度こそ離脱したグランたちは、しばらく走ったところで情報交換がてら小休止を取っていた。感謝の言葉を述べ、深く頭を下げた女性兵士改めカタリナ・アリゼはエルステ帝国の尉官であったが、監視対象となっていたルリアに情が移ってしまい、帝国を裏切り、ルリアを外の世界に連れ出し、今に至る。ここからは島に隠した小型騎空挺で逃亡する予定だという。それを聞いたグランはすぐに案内を申し出た。カタリナは遠慮するが、オルガとビィもグランに同調する。
「カタリナさん、騎空挺のある場所ってどこ？　案内するよ！」
「待て！　これ以上迷惑をかけるわけには…！」
「あァ分かったよ！　連れてってやるよ!!　連れてきゃいいんだろ!!?　お前を、お前らを！　俺が連れてってやるよォ!!!!」
「…ここで姉さんが断っても、こいつら付いてくと思うぜ？」

食い下がる二人と一匹にカタリナはついに折れた。騎空挺の場所を伝え、すぐにピンと来たグランを先頭に、一行は再び走り出す。あと少しで森を抜けるというところで、突然カタリナが皆を制止した。しかしそんなことではオルガ・イツカは止まらない、止まれない。決めたのだ。最初に死んだあの日、そう決まったのだ。

「待て、止まれ！」

「止まるんじゃねぇぞ…」

カタリナたちを置いて先頭に立ったオルガだが、待ち伏せていた帝国の弩弓隊の一斉射撃を受けてしまう。

「うう〝っ！」

「オルガ殿⁉　何をやっているんだ！　オルガ殿⁉」

突然の奇行に困惑しながらも流れ矢を切り払うカタリナを横目に、オルガはハンドガンで反撃に出た。

「うう〝う〝ぁァァァァ⁉」

放たれた銃弾は三発。内一発が帝国兵の額に命中し、兜をへこませる。彼は戦闘不能となり、すぐさま別の兵が抱えて撤退して行った。得意になるオルガだが、自らも致命傷を負い――斃れた。

「俺は止まんねぇからよ…お前らが止まんねぇ限り、その先に俺はいるぞ！　――だか

らよ…” 止まるんじゃねぇぞ” …!」
「そんな…オルガ殿ォォォ！　こんなところで…!?」
「見て、カタリナさん」
「え？」
　自分たちに付いて来ることを許したせいで…。　と、自責の念でつぶれそうになるカタリナ――いや、オルガの自業自得なのだが――に、グランは声をかける。カタリナがオルガのほうを見ると、不敵な笑みを浮かべてゆるりと立ち上がるオルガの姿があった。それを確認したグランは、驚愕するカタリナにオルガの体質を明かした。
「こんくれぇなんてこたぁねぇ！」
「オルガはこういう奴なんです。殺されても死なないというか…」
「し、信じられん…」
「寸劇はお終いですかネェ、カタリナ中尉ィ？」
　オルガに撃たれた兵士と入れ替わるように、特徴的な髭の男が現れカタリナの名を呼んだ。ポンメルン大尉、と呼ばれた長身の軍人はカタリナを睨み、背任は重罪だと責め立てる。
「村の方では何やらやたら腕の立つガキが守りに就いていて島民の” 協力” を得ることは不可能と報告を受けていますし、これ以上任務を滞らせては帝国の面子が立ちません

からネェ！　――ヒドラを出しなさいィ!!　貴女にも責任は取ってもらいますからネェ、カタリナ中尉ィ…」

「ヒドラだと！　グラン、オルガ殿！　逃げ…」

ポンメルンの号令に呼応するかのように、森全体が揺れた。…何かがグランたちに近づいてきている。足音はどんどん大きくなり、やがてグランとオルガの前に、五つ首の巨大な化け物が現れた。猛スピードでの突進をかわしきれず、グランは弾き飛ばされ、オルガたちと分断されてしまう。

「ぐぁ！」

「グラン!?」

「…待ってくれ…！　俺ならどうにだって殺してくれ、何度でも殺してくれ!!　アイツの命だけは…」

どうか間に合ってくれと、オルガは走った。確かにオルガがグランの前に立ちさえすれば、それですべてがひっくり返るだろう。しかし、オルガの希望は、あっけなく…散った。

「グラン！　おい！　しっかりしろよぉ…！　…おいってばぁ…」

「……ッッッあ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ーーーッ!!」

腹を深く切り裂かれ、仰向けに倒れているグランと、小さな手で彼の身体を揺さぶる

ビィ。オルガはその場に膝を付き慟哭した。オルガは人間がどれだけ血を流せば死ぬのかを良く知っている。だから一目見てオルガには分かってしまっていた。グランはもう助からない。

　しかしルリアだけはそれでも諦めなかった。

「大…丈夫…。私の力、あなたに預けます…グラン！」

　ルリアがグランに手をかざすと、不思議なことにグランは立ち上がった。服は斬られたままだが、その下の肌は傷一つなくなっていることが分かる。狼狽したポンメルンが出した攻撃命令を受け、ヒドラが咆哮する。しかしルリアとグランの表情には”勝てる”という力強い確信が宿っているようだった。

「始原の竜、闇の炎の子…汝の名は――――！」

「「プロトバハムート（カアー）！」」

　舞い降りたのは”始原の竜”でも”闇の炎の子”でもなく、”鉄華団の悪魔”ガンダム・バルバトスだった。落下の勢いと大上段から振り下ろす大質量のソードメイスでヒドラの五つ首を、叩き潰す。仕事を終えた悪魔は召喚士に問いかけた。

『オルガ、次は何をすればいい』

「…決まってんだろ、行くんだよ。ここじゃない何処か、俺たちの本当の居場所へ」

『ああ…行こう。おれたち、皆で…！』

フェイトエピソード　光をもたらす者

「――紳士淑女の皆様！　ご静粛に！　今宵お集まりいただいた皆様にご覧に入れますのは、かのおぞましき伝承――この空の底――『赤き地平』の真実の物語に、ございます……！」

◇

ある劇場の興業が評判を呼んでいると聞き、観劇に訪れたグランたち鉄華団。結果、青の少女・ルリアは恐怖のあまり表情をなくし、赤き子竜・ビィを抱き寄せている。劇の題材が『空の底』にまつわる言い伝えを題材にした、恐ろしいものであったからだ。

――曰く、空の底に踏み入り、生きて戻った者はいない。
――曰く、空の底にはこの世のものではない化け物が跋扈している。
――曰く、空の底の住人は空の世界を熟知している。
――曰く、彼らは悪しき人間を唆し、空の世界を掌握せんと企てている――

「はわわわわわ……！　すすすすごかったですねねねね……！」

「ふ、ふん！　あんなの子供だましじゃない！　ぜ、全然、怖くなんか……！」
　魔法使いの少女イオは強気にふるまっているが、声は震えており、彼女もルリアと一緒になってビィを離さないのだった。二人に強く抱きしめられ、ついにビィは音を上げた。鉄華団団長の片割れ・オルガはそんなビィの身を案じる。誰かが死にそうになっていると、人事とは思えない男であった。操舵士兼”騎空挺グランサイファー”のオーナー・ラカムは少し振りの煙草に火をつけ、少女二人の様子をからかう。
「うぇえ……気持ちワリィ……！　二人とも、いいかげんオイラを離してくれよぉお……」
「勘弁してやれよ……」
「おーおーすっかりビビっちまって。お子様には、ちと刺激が強すぎたみてぇだな？」
「ミカ、お前はどう思う」
「別に。でも、俺達の邪魔をするなら全部潰す」
「ははは……ミカヅキは頼もしいなあ」
　オルガからの問いにやる気満々な答えを返す遊撃隊長・三日月に、グラン団長は苦笑した。ラカムはルリアやイオに言って聞かせるように続ける。
「ま、あり得ねぇだろ実際。例えば”誰も生きて戻らなかった”って話があったが、だったら何でこの下の世界がバケモンの巣窟だって分かんだよ？」

「あっ……!?」
「ガキのための寝物語みてぇなもんだろ。悪いことすっとバケモンが来るぞ～！　ってな？」

「――それが、そうとも言い切れないのですよ」
「へ……？」
「は??」
聞き慣れない声が、ラカムに異を唱えた。
「古より受け継がれし伝承は、必ず、真実を含むもの……」
「もっとも、未来を見通す力を持つのは人のうち、ごく限られた者に過ぎません」
「そして、僅かに断片を知りえたとしても人の一生では、その全容に迫ることなどとてもできはしない……」
「そのはずでした。これまでは……」
声の主は、ぞっとするくらい顔立ちの整った青年だった。背中に一対の小さな翼の飾りを付けている。
劇場の暗闇から現れた白髪の青年は、ゆっくりと、グランに歩み寄った。
「かつて、これほど核心に迫った物語が作られたためしはない……」

「この世界が生まれて、それだけの時が流れたということでしょう」
　憂いを帯びた顔で、青年はグランに手を差し伸べる――
「この世界に、危機が迫っている……」
「君が望むなら、私は、世界の真実を教えよう……グラン」
　――人であふれるロビーに、静寂が満ちた。
「マクギリスじゃねぇか……」
「チョコの人か。なんで羽ついてんの？」
「な、なんだ、オルガ達の知り合いか？　しかし見事なもんだな！　兄ちゃん、ここの役者か？」
「ほんと！　まだお芝居が続いてるのかと思っちゃった！」
「芝居……？　いえ私は……」
（この人、僕の名前を……）
　オルガや三日月は青年を知っているようだった。仲間の知り合いと知り、ラカムとイオは青年に歩み寄った。いきなり名を呼ばれ、訝しむグランだけが緊張を解かないでいた。グランは青年を問いただそうとするが、何か言う前にさらに何者達かに割り込まれた。
「――ちょっと待ちな！　アンタ役者志願かい？　アンタならすぐに打ちの花形になれ

るぜ……！」
「おい引っ込んでな！　そいつはこっちが先に目をつけたんだ……！」
「何ぃ!?」

「なんて美しいお方……！　お近づきの印しにぜひ、このお花を……！」
「いいえ、どうか、こちらの細工物をお取りになって？　……そんなもの押し付けようなんて厚かましい方ですこと……！」
「なんですって……!?」

「うわぁ……あっちこっちでつかみ合いが起こってるぜ……」
「ケンカか?」
　あっという間に、青年を中心に、劇団の座長たちが、観劇に来た娘たちが、人々が争いを始めた。呆然と見守るグランたち。しかし……
「――おやめください！」
「おい、兄ちゃん、まさかみんなを止める気かぁ?」
「いや、聞くわけねぇだろ。ありゃ全員、完全に頭に血が上っちまってんぞ……」
「ううん、見て！　みんな、あの人の話すっごく真剣に聞いてる……！」

「「なんでだよ……」」
ビィはこの混沌とした状況に口を挟む青年の度胸に面食らった。ラカムも無駄だと断ずるが、本当に再び静まり返る人々に、オルガとともにあきれ返るしかなかった。
「聞け！　ギャラルホルンの諸君！　今、３００年の眠りから、マクギリス・ファリドの下に……バエルは蘇った!!」

「……、ハァ……」
いつの間にか顕現していたガンダム・フレームシリーズの一柱、ガンダム・バエル。唐突に始まった青年もといマクギリスの演説に、オルガはうんざりといった様子で額を押さえ、空を仰いだ。
「ギャラルホルンを名乗る身ならば、このモビルスーツがどのような意味を持つかは理解できるだろう」
「ギャラルホルンにおいて、バエルを操る者こそが、唯一絶対の力を持ち……その頂点に立つ！」
「席次も思想も関係なく……従わねばならないのだ！　アグニカ・カイエルの魂に！」
再び、静寂が落ちた。そして……

「……せぇいっ！」
「せぇいっ！」
「うう〝っ」

「このっ！　このっ！」
「きゃあっ！　……やったわね!?」
「うう〝う〝ぁアアアア!!」

何事もなかったように人々はまた争い始め、オルガは都合2回自動復活した。
「うわぁ……なんだよ、これぇ……」
「バエルを持つ私の言葉に背くとは」
マクギリスはなぜバエルの威光が通用しないのか分からず、顔をしかめた。”ギャラルホルン”、”アグニカ・カイエル”、”バエル”――空の民にとって初めて聞く単語だらけゆえに、仕方のないことである。……先程までの神秘的な雰囲気はどこにやってしまったのだろうか。
「さて、と……帰るか」
「うん」

「えぇっ!?　この人たちはどうするのよ!?」
「ほっとけほっとけ！　俺はオルガに賛成だ。巻き込まれるだけ損だぜ」
「俺は、もう巻き込まれたぞ……！」

オルガの提案を受け、一行は未だ騒然としている劇場を後にする。
そのときグランは、群衆の中からハッキリと、あの青年の声を聞いた。
「待つんだ！　君たちは、知らなければならない……！」

「アグニカ・カイエルの思そ――」
――聞こえなかったことにした。